



# 東 俣 野 7月号

東俣野小学校 学校だより 平成26年7月1日

## 授業のユニバーサルデザイン化

校長 村田 幹男

近年、研修会などで「授業のユニバーサルデザイン化」についての内容がよく取り上げられるようになりました。

ユニバーサルデザインとは、1985年にアメリカの建築家・デザイナーが提唱した考え方で、使う人に必要な情報がすぐ分かる、使い方が簡単に分かって使えるなど、すべての人にとって使いやすいデザインのことです。そのデザイン例として、他のボトルと区別できるようにシャンプーのボトルにつけられた印、非常口やトイレを絵文字にして表したピクトグラム、黄色の灯火を四角にした交通信号などがあります。ユニバーサルデザインの領域は、製品・施設・都市などの目に見えるものから始まり、サービスやシステムなどの目に見えないものまで多岐に渡るようになりました。

つまり、ユニバーサルデザインは、すべての人が利用しやすく、暮らしやすいように、ものづくりやまちづくり、環境づくりを行うという考え方です。

学校には発達障害をはじめ様々な困難を抱える子どもたちがいます。こうした子どもたちがもう少し過ごしやすくなる形をつくることができなかと考える中で「ユニバーサルデザイン」との関連がでてきました。その支援は他の子どもたちにも学びやすさにつながるわけですから、この考え方を授業に取り入れるということは、クラスの中のすべての子どもにとって分かりやすい授業を行う、ということになります。

大正中ブロック協議会でも講師の先生からそのポイントが紹介されました。

まず「見通しをもたせる工夫」。例えば、1時間の学習の流れを書いて掲示しておくようにします。先が見えない状況やあいまいな状況に弱い子どもにとっては、授業の流れや次にすることが分かることで、見通しがもて、安心して課題に取り組むことができます。また時間配分を目に見えるようにして、時間の区切りを明確にし、作業や課題に取り組みやすくすることも有効な支援となります。

さらに「視覚化の工夫」。指示・伝達事項は、耳から入ってくる情報だけよりも視覚的に分かりやすい提示をそえてやる方が、明らかに認知・記憶が高まります。発問の板書、ICT等を利用した資料の拡大提示など工夫が大事ということです。

具体的には様々な支援の方法がありますが、特に上記のポイントは、目新しいことではなく、われわれ教師は、昔から先輩教師から学んでいる内容です。

だからこそ、もっと意識し実践していきたいと考えます。

